

07.

四国

四国地方会

水重 克文

(国立病院機構高松医療センター)

四国には霊場八十八箇所があって、多くの人がそれぞれの目的を持って巡礼の旅に訪れています。巡礼といっても様々で、一步ずつの時間をかけた徒歩による個人での企画によるものから、タクシーツアーとして設定されたものまであって、巡礼にかけける思いもまた様々であろうと感じます。

さて、超音波が医学の世界に应用されるようになり、その有用さを認める先人たちが集会を持って、さらなる発展を目指して議論する。そんな潮流が起こり始めて、もう50年が経ちました。私事ながら、30年余り前、医師としての道を歩み始めた頃、体に優しく、しかも多くの生体情報を得ることができる超音波医学に興味を持って、その道への一步を踏み出すことになりました。振り返ってその頃を思えば、超音波医学会が発足してから約20年を経過した時点ということになります。まさに、超音波医学が大きく発展しようとしていた頃で、循環器領域では実時間断層心エコー装置が完成した時期でもありました。それからの超音波診断装置の発達 はめざましく、ドブラ法との複合化あるいはカラードブラ法の開発、さらにはコンピュータ技術の導入などによって、病態診断の精度は著しく向上しています。

このような超音波医学の進歩の過程にあって、超音波医学を「より広く普及させてより多くの患者さんの利に具さなくてはならない」との考えから、地方会活動が提案、開始されました。第1回超音波医学会四国地方会学術集会は、香川医科大学医学部（現在は香川大学医学部）の松尾裕英名

誉教授を大会長として、1992年3月7日、高松市にて開催されました。同時に地方会組織も整備されて、社団法人日本超音波医学会四国地方会としての運営要領が制定され、1993年1月30日から施行されています。要領には、目的として「本会は、社団法人日本超音波医学会の地方会として、四国地区における超音波医学に関する学理及び応用の研究についての発表、知識の交換、情報の提供等を行うことにより、超音波医学及びその関連学問領域の発展と普及を図り、もって我が国における学術の進歩に寄与することを目的とする」と記されています。

そもそも医学は診断と治療からなっており、さらに診断技術は医師の思考力、観察力および応用力といった人の持つ能力と、それに平行しながら進歩する工学技術との調和した複合体であることは、先人達の示される通りと思います。要領には、その意味するところが簡潔に織り込まれています。全国集会より以上に、幅広く議論してより細かく、時として不完全であっても小さなアイデアをも共有しながら、超音波医学、さらには医学そのものの進歩に寄与しようというものだと思います。

ところが、四国には地の利という点では、首都圏や近畿圏に比べてやや不利な面があります。検査をしながらふと思いついたことを、隣の建物にある工学部あるいは機器メーカーの研究室に持ち込むなどといった、ホットなアイデアの提案が難しい。逆方向の情報も入りにくい。経済規模が小さいという点からも、革新的装置が四国に導入され

ることは少ない。こんなハンディーを背負いながら四国地方会は、頑張っています。

このような事情から、学術集会には教育的要素を多く取り入れています。第12回学術集会(2002年)からは、本部主導で地方会講習会が同時開催となっており、診断の基本から高度な応用に至る広く且つ深い内容へと年を重ねる毎に充実したものになりつつあります。より広い地域への情報提供という意味からも、学術集会は、四国4県を香川、愛媛、高知、徳島といった具合に反時計回りに巡回して開催しています。これまでの学術集会大会長は、循環器科10名、消化器科6名、産婦人科3名、および放射線科2名の先生が担当されており、できるだけ偏った領域にならないようにも工夫しています。1度の学術集会で30～60題の演題が発表され、これに対して100～300名の参加者がありました。参加者は年々増加しつつあり、特に検査技師の先生方の参加が増えているように思います。

四国地方会の事務局は、四国電力本社(ヨンデビル)内に設置しています。高松駅から徒歩10分という位置にあって、しかも高松駅までは最も遠い松山駅からでも約2時間、最も近い徳島駅からは約1時間で、いざという時には各地域の運営委員の先生方に短時間のうちにお集まりいただけます。事務局には非常勤の事務員1名を雇用しており、地方会の維持管理や学術集会の補助などの仕事をお願いしています。

このような状況にあって、2008年4月から運営委員長を拝命いたしました。支部活動の目的が、「超音波医学に関する学理及び応用の研究についての発表、知識の交換、情報の提供」といった高いレベルにありますから、学術集会の大会長と協

議した上で、より高度な研究についての発表演題を募ることが、最優先課題ということになります。そのためには、研究活動自体を活性化しなくてはならない。地方会事務局としての活動範囲を越えてしまうかもしれないが、大規模研究への志向が高まっているといったことを勧誘すれば、今後の方向その①として、四国内での施設間の橋渡しの役割も担って行きたいと考えています。臨床研究の基本に立ち返って考えれば、やはり症例報告も重要です。1症例が、大きな研究課題への発想の始まりになることもある。その意味においては、今後の方向その②として、小さな「超音波医学に関する応用」としての症例報告も大切にしたい。今後の方向その③は、教育です。日常臨床が専門技師を中心としつつある現状にあっては、医師については基本的手技の習得と深い知識が、技師にあっては超音波の特性や装置についての深い知識と病気についての広い知識が要求されます。地方会講習会は、この目的を達成するために入念な配慮がなされています。また、企業や医師会が主導される研究会や講習会も多く企画されています。現時点ではこれらの開催の現況を正確には把握していません。アンケートなどによる調査を行って、効率的教育の参考にできればと考えています。

いずれにしても、日本超音波医学会が全体のまとめ役として主導していかななくてはならないと思います。研究資金の調達や専門技師資格の意義付けなど、親組織の力の如何が、「今後の方向」の達成の可否に関わっていると思います。霊場八十八箇所を一步一步めぐりながら迷いを払拭するかの如く、1例1例を大切にしながら作戦を練っています。